

主体性の病理

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

リオタールのいう「小さな物語」の時代は、無数の「小さな物語」が氾濫する時代であり、互いに自己の物語の優越性を主張し対立しあう時代である。したがって、現代では自己の物語が常に自他によって相対化され、維持できなくなる可能性に晒されるゆえ、筆者は個人が自己の物語を信頼し、維持する力と、必用に迫られたときには、自己の物語を手放す力が必要になると考える。また、社会学者であるギデンズは現代を、個人が目標を掲げ、それに向かって絶えず自己を統御する「再帰的な行動様式」が求められると強調する。「再帰的な行動様式」は自己の物語を維持する力となるが、それによって、個人が一つの生き方に執着することになり、新たな物語を創造していくことが困難になる。この行動様式が病理として現れる事態がアディクションであり、それは「意識の自由」を喪失していく「即自化」の病理である。「意識の自由」は自己の物語を破壊し、新たな物語へと個人を向かわせる力となるが、その力を獲得するためには、「再帰的な行動様式」を手放す必用がある。そのために、目的に向かって統御されることなく、自己を支える力を十分に内面化することが必要となる。筆者は、この力をマルチン・ブーバーのいう〈われーなんじ〉の関係性に捉え、「小さな物語」の時代に求められる力として「再帰的な行動様式」、「意識の自由」、「自己を越えた存在との関係性を内面化する力」の三つを想定した。本論文では、「意識の自由」と、その喪失を意味する「即自化」の病理現象を、サルトルの理論から考察し、更に「自己を越えた存在との関係性を内面化する力」を、ブーバーの『我と汝』から考察した。「意識の自由」については、それが主体者の決断をも凌駕する瞬間であるゆえ、日常性を維持する「再帰的行動様式」に押さえ込まれることを確認し、臨床的な具体例として、吉良の「主体感覚の希薄化した体験」と浦島の「強迫現象」を取り挙げ、「即自化」の病理について論考した。その結果として、筆者は、意識の「両義性」からして、「即自化」は、誰もが陥る可能性の一つであること、更に、それは患者が身体的に囚われる現象であることを明らかにした。最後に、筆者はブーバーの『我と汝』から、〈われーなんじ〉関係は、自己を越えた存在との「出会い」のなかで、個人が主体性を手放すことで、「真の相互性」を内面化し、新たな物語を創造する力になると結論付けた。